



日動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号 (動力車会館)

電話 (鉄電) 千葉 2935・2939 番
(公) 043 (222) 7207 番

98.4.21 No.4772

最大の正念場を 迎えた国鉄闘争④

国鉄闘争の位置

国鉄分割・民営化攻撃の真の狙いは、国鉄労働運動の解体にあった。当時、中曽根、レーガン、サッチャーは、危機にたつ資本主義体制を維持するために、労働者の抵抗・労働組合の闘いを叩きつぶし、弱肉強食の競争原理を解き放つ以外ないと主張し、新自由主義といわれる暴力的攻撃をしかけた。

一方、国鉄労働運動は、つねに日本労働運動の中心に座り、その動向が全体を制するという位置にあった。国労は、戦後労働運動を象徴する存在であり、新自由主義路線を貫徹するためには、絶対に息の根を止めなければならぬ労働組合であった。だからこそ攻撃は徹底かつ執拗をきわめたのである。

そして今、労働運動が連合路線の下に支配され、しかも、首きり・リストラ・労働強化・賃下げなど、激しい攻撃が労働者に襲いかかる今日の状況のなかで、国鉄闘争は、労働運動の総屈服を阻み、「労使は社会の安定帯」という構造を揺るがす位置を占めている。

国鉄闘争の可能性

しかも、今後失業者は、否応なく五百万人〜八百万人に達するであろうと言われている。これは、戦後の一時期を除いて、誰も経験したことのない状況だ。ばう大な失業者が街にあふれる状況のなかで一体何が起きるか。怒りの声に一旦火が付いたら、予測をこえて燃え広がりがねない。国鉄闘争は、その起爆剤となり、結集軸となりうる可能性を秘めた闘いだ。橋本は、今のうちに火種を消してしまわなければ、枕を高くして寝ることのできないと考えているのだ。資本主義体制の危機は、今や手の施しようもない状態だ。橋本は、行革・規制緩和・大失業攻撃をふりかざし、この危機を、なりふり構わず、労働者への犠牲転嫁と戦争政策によってのりきろうとしている。全産別で、国鉄分割・民営化型の攻撃が開始されている情勢のなかで、全国の広範な労働者が、国鉄闘争の重要性を感覚的・直観的に感じ、自分たちの課題として支援し闘っている。敵はこうした状況をよく見ていて、だからこそ国労をつぶそうとしているのだ。われわれは、国鉄闘争が、日本の労働者全体の未来を左右するような、戦略的位置にたつてい

ることを忘れてはならない。

動労千葉の闘い

われわれの決断

われわれは、分割・民営化攻撃の本質を真正面から見すえ、これを、避けて通ることのできない、呵責なき労働組合の解体攻撃であると認識した。そして、団結を守りぬぐためにも、嵐に抗してストライキに立ちあがる以外にない決断し、二波のストに決起したのである。

以降十数年間、われわれは「JR体制の打倒」を主張し、敵の側も「動労千葉解体」を掲げて襲いかかる関係のなかで、引くことのできないせめぎ合いを貫いてきた。国労の置かれていた位置も本質的には同じである。国労が譲歩すれば、その存在を認めるといふ関係ではない。国労指導部はこのところで情勢を見誤り、錯覚に陥っている。

国鉄攻防の性格

動労千葉に対する攻撃は、差別や配転というレベルにとどまらず、2万kmにも及ぶ運転士の担当行路を東京に業務移管して仕事を奪い、あるいは、成田運転区・佐倉機関区・勝浦運転区

という、伝統ある拠点機関区を次々に廃止して職場そのものを奪うなど、まさに存在そのものを抹殺しようとするものであった。業務移管や成田・勝浦の廃止は、資本の論理からいっても何ひとつ合理性がない。しかし、動労千葉を解体するためには、資本にとっての効率性や合理性すら無視して、このような攻撃が強行されたのである。

分割・民営化反対闘争とは、そのような状況のなかで、なおかつ組合員の団結を堅持して、いかに一歩一歩前進を勝ちとつていくのかという、労働運動にとつて最も大切な根源的課題が問われた闘いであつた。われわれは、こうした状況に抗して、労働運動の原則を譲らずに団結を守りぬぎ、ついに、第一波・二波ストで公労法解雇攻撃を受けた28名の仲間たち全員の解雇撤回を実現するという、画期的な勝利をかちとつたのである。

指導路線の問題

動労千葉の組合員は、今も胸をはって職場を闊歩している。一方国労は、職場で見えていても自信なげな組合員が多い。JR総連などは、いくら数が多くても胸を張ることができない。

なぜそうなるのか。それは、結局指導路線の問題である。労働組合の指導部自身が、労働組合とか、労働運動をどのように位置づけて、方針を提起しているのかということが、敏感に組合員の意識に反映されているのだ。日々の運動が本当に労働者のための運動になっているのかどうか、執行部が本音のところ

で、闘いの先頭にたとうとしているのかどうかという差である。

階級的労働運動

つまり、階級的労働運動の内実の違いだ。階級的労働運動とは、資本と労働者の利害は絶対一致せず、非和解的な関係にあることをハッキリさせて闘うということだ。われわれは10年間の攻撃のなかで、その現実を嫌というほど味合わされた。

しかも、現状はより一層深刻化している。この国会で有事立法が成立すれば、労働者は、侵略戦争の先兵にされることになる。だから、階級的労働運動と言う場合の核心点は、究極的には資本主義体制を打倒して、労働者が主人公となるような社会、つまり社会主義社会の建設をめざすという課題をつねに原点にすえて、日常の闘いを全力でおし進めるところにある。

資本が、一定の経済成長を続けている時代には、建前と本音の使い分けもある程度は通用したが、現在の状況下ではもはやそのようなことは通用しない。明確な階級的労働運動の立場にたちきる以外に、様々な攻撃と対抗することも、組合員の団結を維持することもできない情勢が到来しているということだ。われわれは、このような認識にたつて、一つ一つの課題に全力でたち向い、その闘いを通して自らの変革をかちとり、組合員の団結を固めていくという運動のあり方を執拗に追求してきた。

指導路線のあり方

一つの闘いのなかでも、どの